

特選

「命に関わる仕事に触れ」

中野智己（財団法人化学及血清療法研究所 第一営業部 福岡営業所）

会社へ一本の電話が入った。相手は、K大学病院小児科のA先生であった。用件は、『電撃性紫斑病疑いの患者があり、弊所の治療薬「B」を使うかも知れない』という内容であった。初め自分の耳を疑った。何せ電撃性紫斑病とは、国内での年間発症例数は約十例、極めて稀な疾患であり、しかも「B」は低用量の小児でも1回の治療費が数百万円かかる超高額な治療薬なのである。

その足でA先生を訪問した。事態は相当深刻であった。患者は1歳の女の子。細菌感染症を契機に、敗血症さらにDIC（注1）へと進展し、四肢が壊死する電撃性紫斑病を引き起こしていた。血栓が頭に飛び、脳梗塞も合併していた。どんな治療を施しても全く改善の兆しが見られず、こうしている間にも壊死は進行している。一刻を争う事態であった。

しかし「B」はどこの卸にも在庫されていない、極めて稀で高額な医薬品である。さらに難解なことに、本症例が「B」の保険適応となる「先天性PC（＝プロテインC：血液凝固を抑制する働きを持つ）欠乏を伴う」ことを満たしているかどうか、現時点で不明であった。もし後になり、適応を満たさないことが明らかになれば、数百万円の治療費は全て患者家族の自費で支払わなければならないリスクを背負っていた。そのことも含めた家族への説明と同意を経た上でなければ、「B」の投与は行えないという状況であった。

不幸中の幸いに、隣県の弊所配送センターに薬はあった。「わかりました。私は今からすぐに薬を取りに行きます。説明終了後すぐに投与を行うか否かを電話で知らせて下さい。」と言い残し、私は配送センターへ向かった。患者の家族にとっては、想像を絶する苦渋の決断を強いられたことだろう。それでも瀕死の幼い我が子を目の当たりにし、最後の手段として説明された治療法が仮に数百万円を要するものだとして、それを断るはずはなかった。私は薬とともに学術担当者を引き連れて再び病院へと向かった。入念に、投薬前の確認、情報提供を行うと、速やかに「B」が投与された。

奇跡が起こった。数日後、見事に四肢の壊死が消失した。命を繋ぎ止めることさえ困難、仮に助かっても四肢の切断は免れないと覚悟を決めていたA先生が、目に涙を浮かべ「こんなに感激した事は、医者になってから数える程もない」と喜んだ。それを聞いた私も涙が溢れた。MR＝「人の命に関わる仕事」、これを心の底から実感した。ちょうど私にも2

歳と4歳の子供がいた。患者の親御さんの気持ちも痛い程わかる。そういった感情も相俟って、この時のことを思い出すと今でも涙がこぼれる。かけがえのない体験であった。

実は、このA先生には、過去に何度か厳しく叱られた経験があった。普段はとても優しいが、仕事にはプライドと厳しさを持って臨む一面を持つ。ただ、中には言い訳の立つような場面もあった。しかし、この時私はこう考えた。MRは医薬情報のプロである。プロである以上、叱られたりクレームをつけられるような隙を作ったとすれば、それは全て自分の落ち度である、と。政治家が失言を発し国民から非難を浴びる時、プロスポーツ選手が結果を残せずファンからブーイングを浴びる時、決して言い逃れはきかない。これと同じである。隙を作ってしまった以上、反省し、今後に活かし、より隙がなく完成度の高いMR活動を目指さねばならないと思うように心を切り替えた。そういう考えに至らしめてくれたA先生との今回の出来事であるからこそ殊更、感慨深いものであった。

弊所への就職活動時の面接を思い出す。なぜ弊所を選んだのか？その最大の理由 - 私は幼少時代の大親友と学生時代の大先輩、2人のかけがえのない命を失った経験がある。人一倍、命の尊さについて考えた。そして、人の命に関わる仕事がしたいと考えた。これが、MRをする上での私の原点である。一体どのような活動をすればよいのか、疑心暗鬼に陥ったことも何度もあるが、今回の事例以外にも、MRとして嬉しさの込み上げる場面、人の命に関わったことを実感できる場面に幾度となく遭遇した。そして、MRになり早十数年が経ち、疑心暗鬼に対する解答を見出したかということ、まだまだ暗中模索といった部分もある。ただ一つ自信を持って言えることは「人の命に関わる」という自覚と誇りは決して忘れてはならないということである。それを持てば、自ずと責任ある活動を行う。そして、自覚と誇りと責任を伴う活動には、さらに自ずと自信が伴う。十数年のMR活動から得た結論としては、随分とシンプルだが、シンプルな中で多くの感動にこれからめめぐり合いたい、そう思っている。

注1) DIC: 播種性血管内凝固症候群